

トップ直撃インタビュー

一ノ蔵酒類販売

浅見周平 社長



見社長は「仕事帰りの一杯に加え、出張などビジネスパーソン回帰の影響も大きい」と分析する。商品では晩酌酒として多くの通に愛される一ノ蔵

一ノ蔵50周年

宮城県大崎市に本社蔵を構える一ノ蔵。大松沢丘陵の豊富な地下水と良質な米に恵まれた、自然豊かな環境だ。1973年(昭和48年)に浅見商店、勝来酒造、桜井酒造店、松本酒造店の4社により設立され、2023年(令和5年)に50周年を迎えた。

「一ノ蔵型六次産業」を標榜する中で、「第三次産業」にあたる一ノ蔵酒類販売では、清酒販売を通して消費者へ日本酒とそれを取り巻く多種多様な文化の継承と発信を行っている。「食生活の変化とともに、日本酒も、もっと自由に様々な楽しみ方ができるはず」と、多様な清酒の楽しみ方の可能性を提案する浅見周平一ノ蔵酒類販売社長に話を聞いた。

(聞き手 柴田明子)

型にはまらない「日本酒の自由な楽しみ方」を発信

2020年に始まったコロナ禍は、業務用に大きな影響をもたらしたが、22年から人流回復に伴い落ち着きを見せ徐々に回復。この流れは23年も続き、1~7月の県内の業務用向けの販売概況は前年比3割増(金額ベース)と順調な動きを見せているという。

「ロングセラー商品「無鑑査本醸造辛口」をはじめとする定番を中心に動いていることから需要の底堅さがあるか？」

同社では8月に新たな期がスタートしたが、「今期は定番をしっかりと提案しながら、同時に「一ノ蔵純米吟醸」の魅力を発信することでアップセルを狙っていききたい」と意気込む。23年3月に発売を開始した「一ノ蔵純米吟醸」は、宮城県産原料米の特徴を生かしながら2種類の酵母を



出展や店頭試飲販売など可能な場所では対面で、同時

使用することで、穏やかに立ちのぼる優しい香りに、瑞々しく軽快な味わいと後切れの良さを引き出した。

「キリッとした冷やして、普段飲み」として楽しめる仕上がり。新たな定番として提案することで選択の幅を広げていく(浅見社長)。

「一ノ蔵の魅力を発信する中で大切にしているのは消費者とのタッチポイントで、「コロナ禍が落ち着き、ようやく対面式のイベント等が再開できるように変わったのは嬉しい事。イベント

にコロナ禍で得たオンラインの知見も生かしながら積極的に発信し、イベント後のフォローアップもしながらファンとの絆を深めていきたい」と話す。

9月以降、県内外で試飲即売会を展開しており、11月には東京での「一ノ蔵を楽しまむ会」を再開。春先の蔵開放なども計画している。オンラインの「一ノ蔵を楽しまむ会」も継続の意向



えるなど自由に楽しんでほしい」と話す。日本酒の自由

な楽しみ方を発信すべく、業務用へ向けて「無鑑査ハイボール」や「ひめぜんソーダ」を提案しメニューへの導入が進む中で、「飲食店で体験することで、こういう飲み方があるのか」「日本酒でもこの飲み方をしても良いんだ」と気が付いてもらい、日常的に自由な飲み方で楽しんでほしい」との狙いがある。家庭用に向けては、自由に

で、「遠方の方からは気軽に参加できる」との声を頂いているほか、ゲストを交えたトークや製造現場からの中継などライブ感のあるオンラインならではの内容が好評だ」という。

また、ユーザー定着に向けて日常的な楽しみ方を提案する中で、「食の多様化とともに日本酒の飲み方も多様化していかねば、度数が高い」「堅苦しい」「明日は休みだから日本酒を飲もう」など気構えずに、好きな濃さやフレーバーを加

アレンジを楽しむ」をコンセプトとした「酒+(サケプラス)」を展開。甘く濃厚な原酒で、そのままでも、ロックでも、ミントを加えても、ハイボールなどでも楽しめる味わい設計だ。中でもソーダ割は、「日本酒由来の豊富なアミノ酸により旨味のある仕上がりとなり、料理の味わいを引き立たせる事が特徴だ」という。



ントを引き出す調査を試みた。両蔵の共創により、優

新たな取り組みでは、この秋、同じく宮城県の酒蔵である浦霞とタッグを組んだ「特別純米酒うららとくらら」を発売。50周年を迎えた一ノ蔵と来年300周年を迎える浦霞による初のコラボレーション商品。2年限定の取り組みとして今回は一ノ蔵がパッケージ等を担当。「若年層をはじめ、世代にかかわらず、日本酒をもっと自由に楽しんでもらえるよう、蔵元の垣根を超え、新たなチャームポイントを引き出す調査を試みた。両蔵の共創により、優



「SCAJ 2023」大盛況 10月1日「国際コーヒーの日」



UCC上島珈琲は、UCCグループ所属のブリュワールによる多彩な抽出方法、このほど発売したプロ監修のメニューが作れるカプセル式

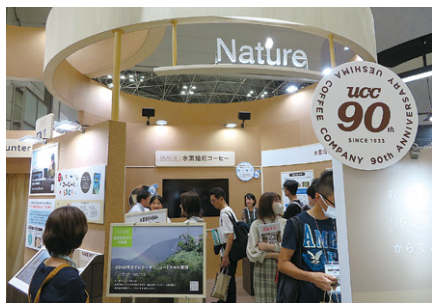


現在では小型機のみだが、2025年には富士工場に大型機を導入する予定。水素焙煎をイメージしたロゴも披露し、里見 陵取締役副社長によると「近い将来、製品のパッケージにデザインしたい」考え。「消費者に付加価値と認めてもら

UCC上島珈琲は、UCCグループ所属のブリュワールによる多彩な抽出方法、このほど発売したプロ監修のメニューが作れるカプセル式

「#トアルコトラジャ」がX(旧Twitter)でトレンド4位に入るなど、積極的に取り組んでいる。また、セブナイレブ・ジャパンは、11月から期間限定発売の「セブナカフェブルマウンテンブレンド」を披露した。

10月1日「国際コーヒーの日」に先駆け、スペシャルティコーヒー展示会「SCAJ 2023」が9月27〜30日、東京ビッグサイトで開催。一時は入場制限がかかるなど大盛況だった。生豆価格の高騰などコスト面が懸念されるコーヒー業界だが、「コロナの5類移行を機に、カフェ開業を目的とした来場者も多い」(業界関係者)と依然として人気コンテンツのようだ。



「#トアルコトラジャ」がX(旧Twitter)でトレンド4位に入るなど、積極的に取り組んでいる。また、セブナイレブ・ジャパンは、11月から期間限定発売の「セブナカフェブルマウンテンブレンド」を披露した。



しく華やかな香りとキレのあるカジュアルな特別純米酒に仕上げた。カエルのキャラクターを採用し、日本酒の印象を「カエル」新

既存のイメージにとられない自由で楽しい飲み方を提案する浅見社長だが、自身は「暑い時期にクーラーの効いた部屋で烟酒を飲む

の組み合わせなど、お酒には楽しい発見がたくさんある。この楽しみを伝え続けていきたい。その中で、飲み方に正解はないと思っ

いる。今日は無鑑査をロックで「今日は爛で」など好みや気分に合わせて気構えずに楽しんでほしい。一ノ蔵50周年を迎え、着実な

成長に向け、新たな飲み手を開拓獲得していきたい」と自由に楽しむ事の発信・普及が今後のカギとなる可能性を示唆した。

成長に向け、新たな飲み手を開拓獲得していきたい」と自由に楽しむ事の発信・普及が今後のカギとなる可能性を示唆した。



「コーヒーのサブライチエーションにおける、安全で健康的な労働環境の実現に向け、最新動向の共有及びステークホルダーの協力について検討。同国ウイラ県コーヒー部門競争力地域委員会との連携のもと、ディーセント・ワークの課題、コーヒー収穫・栽培者の労働条件の改善について共通ビジョンを策定する。」

「#トアルコトラジャ」がX(旧Twitter)でトレンド4位に入るなど、積極的に取り組んでいる。

「#トアルコトラジャ」がX(旧Twitter)でトレンド4位に入るなど、積極的に取り組んでいる。

「#トアルコトラジャ」がX(旧Twitter)でトレンド4位に入るなど、積極的に取り組んでいる。

「#トアルコトラジャ」がX(旧Twitter)でトレンド4位に入るなど、積極的に取り組んでいる。